

基 調 報 告

愛知教職員組合連合会



松崎教育担当

これまでの72次にわたる教育研究において、わたくしたちは夢と希望あふれる教育の創造をめざし、子どもたちを中心にすえ、それぞれの学校・地域の特色を生かした、自主的・主体的な教育研究活動を着実に積み重ねてきました。また、各種調査でいただいた声をもとに、今日的な教育課題を明らかにするとともに、各地域で教育対話集会や講演会などを行い、保護者や地域の方々と意見交換をする中で、子どもたちが自ら課題を見つけ、主体的に判

断し、行動できる「生きる力」を育む取り組みについての合意形成をはかってきました。そして、各学校では子どもたちの健やかな成長を願い、日々教育活動に取り組んできました。

さて、小・中学校で新学習指導要領が全面実施されて数年経ち、現在「令和の日本型学校教育」という新たな名のもと「すべての子どもたちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学び」の実現が求められています。新学習指導要領で学習内容が増加されたにもかかわらず、新たな「学びの姿」を現場に求めるなど、政府主導の教育改革が矢継ぎ早に推しすすめられ、学校現場では子どもたちも教職員もゆとりがなくなっているといっても過言ではありません。本来、教育改革は学校現場から行われるべきであり、子どもたちに必要な「生きる力」は、ゆとりとふれあいを保障する教育課程の中で育まれるべきであると考えます。

わたくしたちは、あくまでも学習指導要領を大綱的基準としてとらえ、未来を担うすべての子どもたちのために夢と希望あふれる教育を創造する取り組みを継続し、学校現場からの教育改革を推進していかなければなりません。そのためにも、基礎・基本の確実な定着はもちろんのこと、子どもたち一人ひとりが学ぶ意欲をもち、自らすすんで取り組む、より質の高い学びを大切にしていかなければなりません。また、人・自然・文化などとかかわり合い、地域に根ざした体験活動を中心にした学習を構築し、学校・家庭・地域の連携をよりいっそう強化し、

協働して、地域ぐるみの教育を推しすすめていかなければなりません。

今次の教育研究活動においても、ゆとりとふれあいの中で「わかる授業・楽しい学校」の実現をめざし、「学びの質をより追究するとともに、子どもたち一人ひとりの意欲を大切にし、学ぶ喜び・わかる楽しさを保障する教育課程編成活動をすすめる」「学校・地域の特色を生かし、家庭や地域社会と協働をはかりながら、人・自然・文化などのかかわりを大切にした創意あふれる教育課程編成活動をすすめる」の2点を研究推進の重点として提起しました。わたくしたちがすすめる教育改革は、日々の教育実践を積み重ね、その中で成長していく子どもたちの姿で示すべきであると考えます。各分科会においては、実践研究の報告をもとに、活発な議論を展開するとともに、その成果を各単組・分会に持ち帰り、還流をはかっていただくことを大いに期待します。

また、本日の全体会の後には、各分科会会場で行われている研究発表や討議の様子をみなさま方に参観していただきたいと思えます。愛知県内の優れた教育研究にふれていただくことで、本日ご参集のみなさまとよりよい教育についてともに考え、共通理解をはかる場にしたいと考えています。

最後になりましたが、この教育研究愛知県集会在愛知の教育のさらなる推進のため、そして何よりも目の前の子どもたちの健やかな成長のために、実り多いものとなることを祈念し、本集会開会にあたっての基調報告といたします。

第1分科会【国語教育】

文学その他

1. 全体を通して

「すべての子どもたちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学び」の実現にむけたりポート発表、その発表をきっかけとした積極的な討論が展開された。各りポートの実践から、討論の柱に沿って追究する課題を焦点化することで、充実した意見交換が行われた。また、「読む活動」という各討論の共通項をもとに、目的や教材、指導の工夫、主体的・対話的な学びのあり方について討論がなされ、各実践に対する意見交換を通して、分科会の参加者にとって有意義な時間となった。

2. 討論の内容

〈読む活動を通して、どのような力を身につけさせるのか〉では、目的を明確にして、子どもの主体性を高めようとした実践や汎用的な読解力の向上をめざした実践などが報告された。また、観点を絞って子どもが作品を批評したり、動画を活用した導入や振り返りの活動から作品に込められた思いを読み取ろうとしたりするなど、系統的かつ効果的な実践も報告された。討論では、子どもの個別の読みに対する支援の方法や、子どもどうしのかかわりを促す手だてなどについての意見交換が行われた。

〈読む力を高めるための教材の活用方法〉では、教材の活用方法の一つとして、心情の数値化や構造の図式化をしたり、副教材を活用したりして主題に迫ろうとする実践などが報告された。討論では、副教材の提示のタイミングや教材の時代背景を、どこまで、どのように伝えるかなどの意見交換が行われた。

〈読む力を高めるための指導の工夫について〉では、正確に読み取りをすすめたり、読み取りの解釈を広げたりする実践が数多く報告された。「プチ面白さ解説カード」や「ペープサート」による音読指導といった、視覚的に読み取ったことを認知しやすくしたり、ICT機器の共有機能や共同編集機能を活用することで効果的に交流をすすめたりする報告がされた。討論では、さまざまな手だてを活用する上での教員の投げかけや問いかけが話題となった。ただ手だてを講じるだけでなく、どのようにモチベーションを継続させるのか意見交換が行われた。

〈読む力を高める主体的・対話的な学びのあり方について〉では、主体性を育む上で有効な課題設定の仕方や円滑な対話を促すための班編成の工夫、対話を支援する教員の声かけの方法などさまざまな実践が報告された。討論では、対話を深める上で必要となる知識・技能をどのようなタイミングで、どのように指導するか意見交換がされた。また、対話で話題の中心になることの多い、文学的文章における主題について、子どもから実際に提出されたものを検討したり、主題とはどのようにとらえるべきか話し合われたりした。

3. 今後に残された課題

- (1) 物語の主題に迫ろうとする実践に対する、作者の意図と読者の読みの妨げにならないような指導の工夫
- (2) 深い学びにつながる評価基準の設定と子どもたち独自の読みを保証する授業づくり
- (3) 系統的な指導、ルーブリック評価を通して、国語教育で子どもにどのような力を身につけさせるべきか

作文その他

1. 全体を通して

作文（つづり方）の教育五本と、言語の教育二本、音声表現の教育三本のレポートが報告された。子どもたちの実態を見つめ、文字言語・音声言語の特徴を生かして、どのような力を育てていくのかについて討論が展開された。

2. 討論の内容

- (1) 作文（つづり方）

〈何のために・何を〉

「説得力のある文章を書くことができるようになるための手だてや支援の方法」を柱として討論が展開された。

どのような学習発表会にすべきかをテーマに、自分の考えを意見文に書く実践や、資料を効果的に使い、調べたことを新聞にまとめる実践が報告された。

討論では、説得力のある文章を書くために必要なことを、モデル文から気付かせることの重要性が確認された。

〈何を・どのように〉

「自分の考えをわかりやすく伝える文章を書かせるための手だてや支援の工夫」などを柱として討論が展開された。

子どもたちに学びを選択させる自由進度学習の実践や、思考ツールやICT機器を活用した実践などが報告された。

討論では、子どもたちの学びを支えるためには事前の準備が非常に大切であることや、自由進度学習における教員の出方について話し合われた。

助言者からは、文章を書き終えた後の推こうだけでなく、段階的に推こうの時間を設定することで、子どもたちの書くことへの意欲を持続させられることや、成果物だけでなく、活動の様子や毎時間の振り返りといった学習途中の子どもたちからも実態を把握することの大切さについて助言を得た。また、子どもたちが見通しをもって主体的に学習をすすめられるように、評価基準を明確に示すことが必要であるとの助言を得た。

(2) 言語の教育

語彙の学習を子どもが日常的にすすんで行えるよう、教具や学習課題を工夫した実践や言葉を通して楽しく学び合うことができるよう、学校全体で発達段階に応じた手だてを講じた実践などが報告された。

(3) 音声表現の教育

〈何のために、何で〉

「自分の思いや考えを言葉で相手に伝えることができるようにするための手だてや支援の方法について」を柱として討論が展開された。相手意識をもち、聞き手に伝わりやすい話の構成を考えて表現できることをめざした実践などが報告された。

〈何を・どのように〉

文章からわかりやすい文章構成を読み取るために思考ツールを活用した実践や、最後まで子どもが意欲的に学習に取り組むことができるように、子どもの気持ちを大切に単元構想を組んだ実践が報告された。

討論では、協働的な学習の取り入れ方や有効な手だてについて話し合われた。

助言者からは、めざすモデルの提示、子どもたちの評価意識を育てることが大切であると助言を得た。

3. 今後に残された課題

(1) 表現の指導において、表現することに対して意欲が高まるような課題設定と手だてのあり方

(2) 文字言語・音声言語

子どもたちに身につけさせたい資質や能力を焦点化し、明確な目標をもたせること

第2分科会【外国語教育】

1. 全体を通して

「主体的に学習に取り組む態度を育む指導のあり方」「コミュニケーションの基礎となる資質・能力を育む言語活動のあり方」「思考力・判断力・表現力を育む言語活動のあり方」の三つを討論の柱とし、小グループによる発表と討論が行われた。各グループから出された「全体討論への投げかけ」をもとに、全体での討論と意見共有が行われた。

小グループでは、相手意識をもって、英語でコミュニケーションをはかったり、日本と外国の文化の違いに気付きすすんで英語を使ったりできる子どもの育成をめざした小学校の実践や、授業の導入で帯活動を取り入れ、自信をもって自己表現できる子どもの育成をめざした中学校の実践が報告された。質疑応答では提案に対して多くの内容が話し合われた。

2. 討論の内容

(1) 主体的に取り組む態度を育む

単元の導入の工夫や聞き手を意識した活動の工夫について討論が展開された。単元のはじめにゴールを伝えることで子どもの学習意欲を継続させることができたり、身近なものを教材として取り上げることでより意欲的に取り組めたりするなど、参加者から多くの意見が出された。

助言者からは、日常生活でも起こりうる場面や状況を設定することでより高い学習意欲をもって取り組めることや、習った表現をワークシートなどに蓄積することで「学びの見える化」をはかることが重要であると助言を得た。

(2) コミュニケーションの基礎となる資質・能力を育む

コミュニケーション力を高めるために、SmallTalkやALTとの対話などのコミュニケーション活動を継続して取り組んでいくことが大切であると確認され、そのための手だてについて意見が交換された。コミュニケーションを続けていくためにも話すだけでなく、うなずきやリアクションなどの聞く姿勢の大切さなどもあげられた。

助言者からは、小学校と中学校の連携を密にし、それぞれの学校の子どもが学びのつながりを感じられるように取り組むことが大切であると助言を得た。

(3) 思考力・判断力・表現力を育む

表現力を高めるために「場面・目的・状況を明確にする」「英語を使う必然性をもたせ、学習意欲を継続させる」「スモールプレゼンテーションを行い、自己表現できる機会を増やしていく」など、具体的な手だてがあげられた。

助言者からは「言いたい」「伝えたい」と子どもたちが思えるような課題を提示することが大切であり、訂正フィードバックを行い言語理解が深まるよう取り組んでいくことが大切であるとの助言を得た。

(4) 全体討論

小グループから出された「全体討論への投げかけ」をもとに、小学校と中学校の連携を方法やAll Englishに近づけるための方法など、各学校で取り組まれている言語活動について、それぞれの実践をもとに活発な議論がされた。

3. 今後に残された課題

(1) 小学校と中学校との連携

(2) 言語活動の充実とその評価のあり方について

第3分科会【社会科教育】

小学校

1. 全体を通して

地域教材を活用した実践や、対話的な活動を通して互いの考えを交流する実践、思考ツールやICT機器を有効に活用しながら課題を追究する実践などが報告された。

各分野別の討論では、それぞれの実践にもとづいて活発に意見が出され、これからの社会のあり方を考える子どもを育てるために、熱心な議論が行われた。総括討論では、「現在求められている社会科学習における教員の役割とは何か」について、参加者より活発な質疑と柱に沿った議論が行われた。

2. 討論の内容

(1) 地域学習

自分たちが住む町の変遷やそこに暮らす人々の願いについて知ることで、追究する意欲を高め、主体的に取り組ませる実践や、課題解決にむけて思考ツールやワークシートを活用して自分たちができることを考える実践などが報告された。討論では、「身近な事象を教材化した学習活動の工夫と育てたい力」について話し合われた。助言者からは、地域教材を活用することで、子どもたちは学習課題を自分事としてとらえ直し、学びを深めることができるとの助言を得た。

(2) 歴史・公民学習

切実感のある課題設定や思考ツールを活用し、思考を可視化することで歴史的事象を身近なものとしてとらえる実践や、地域社会のあり方について資料やゲストティーチャーを活用したり、調査活動や対話的な学習を通したりして、よりよい社会づくりへの考えを深める実践が報告された。

討論では、「先人の働きや政治の役割を、切実感をもって追究できる学習活動の工夫と育てたい力」について話し合われた。そして、子どもたちが主体的に学習できるようにすることが、確かな社会認識を育むために重要であると確認された。助言者からは、よりよい社会をつくろうとする人々やその思いと出会いながら学習活動を行うことが重要であるとの助言を得た。

(3) 国土・産業学習

地域的な特徴を的確にとらえ、子どもたちの思いや願いに沿って主体的に課題を追究する実践や、子どもたちが調べたことをもとに、多角的に考えて表現したり、ICT機器や思考ツールを活用して考えを深めたりする実践などが報告された。

討論では、「よりよい社会の実現をめざし、主体的に考える学習活動の工夫」について話し合われた。助言者からは、課題や教材の出会い方を工夫し、子どもの主体的な姿を具体的にとらえ、授業をする必要があるとの助言を得た。

3. 今後に残された課題

(1) 子どもたちが切実感をもって主体的に追究するための教材や学習活動の工夫

(2) 現代社会の中で、よりよい社会の実現をめざす子どもを育てるための社会科学習のあり方

中学校

1. 全体を通して

昨今の世界情勢や身近な地域の課題、多様化する価値観のなか、自分たちが主体的に物事を考え、社会とどのようにかわるか、社会科教育が果たすべき重要度が増してきている。そのため、本年度はテーマを四本柱とし、地理・歴史・公民それぞれの観点から授業デザインを行った実践が報告された。

県内十八本のレポート報告をもとに、子どもたちにとってよりよい学びをめざし、学習活動のあり方や教材開発の工夫、教員としての心構えなどについて積極的な質疑や討論が行われた。

2. 討論の内容

(1) 主権者として学ぶ意欲を高める学習活動のあり方

討論では、現在の子どもの、意欲はあるが発表が苦手だったり、自分の考えを再構築することに不慣れだったりする現状に鑑み、それを克服していけるような授業デザインの必要性について話し合いが行われた。学習課題を設定し、明確化することで子どもに自信をつけさせるように配慮した授業の必要性が確認された。また、学校教育だからこその主権者教育の必要性について議論された。

(2) 社会参画の意欲を高める学習活動のあり方

討論では、その時代・地域・社会制度で過ごしたとしたり、自分たちはどのように社会とかかわっていくべきかについて話し合いが行われた。社会参画といっても、子どもには他人事であることが多い。そのため、いかに見通しをもたせ、切実さを感じさせる授業デザインが重要であるかが確認された。その中で、切実さを感じさせるには、子どもにとって身近な素材を教材化することの重要性について議論された。

(3) 地域素材から社会に対する見方・考え方をどう育てるか

討論では、地域素材を教材化するために意識することや留意点について話し合いが行われた。地域素材から現状をどのように子どもが認識するのか、そしていかに自分事として将来を考えられる子どもを育てるかについて話し合いが行われた。また、ゲストティーチャーを活用して、大人のさまざまな考え方を知る機会を設ける多面的・多角的な授業についての有用性についても議論された。

- (4) 対話的な学習を通して社会に対する見方・考え方をどう育てるか

討論では、多様な社会的立場を理解した上で、課題をどのように見るのか、どのように課題に向き合っていくのかについて話し合いが行われた。対話的な学習活動を行うため、課題設定に対して、思考ツールを使用したり、各自治体が採用しているアプリを用いたりするなど、デジタルとアナログを目的に応じて使い分ける効果についても議論された。

3. 今後に残された課題

- (1) 社会の変化に対して、自分の考えをもった上で社会参画を行える人を育てていく授業デザインを意識してつくっていくこと
- (2) 社会科は実技だという観点で授業デザインを意識する必要があるため、子どもが疑問をもち、調べ、話し合う活動を主とすること
- (3) DEI (Diversity多様性, Equity 公平性 & Inclusion包括性) という、新しい時代を見据えながら社会科をつくっていくこと

第 4 分科会 【数学教育】

算 数

1. 全体を通して

「主体的な学び」「対話的な学び」「思考力・判断力・表現力の育成」の三つの柱立てで、実践の報告が行われた。

実生活に即した教材やタブレット端末を活用して子どもの主体性を育む実践、ツールを用いて自分の考えを視覚化しながら対話を行うことで子どもが考えを深めることをめざした実践、段階的な板書や振り返り活動によって数学的な見方・考え方を働かせながら思考力・判断力・表現力を育む実践などが報告された。

どの報告も、目の前の子どもの実態をもとに、子どもの力をのばしたいというねらいを感じるものばかりであった。

2. 討論の内容

- (1) 主体的な学び

実生活に即した問題を設定することで子どもから問いを引き出してすすんで解決に取り組めるようにしたり、自由進度学習を効果的に取り入れることで子どもの主体性を育んだりする実践などが報告された。

討論では、子どもの主体性を引き出すための教員の働きかけ方や、自由進度学習を取り入れる際の考え方の共有の仕方などについて話し合われた。

助言者からは、子どもが算数で学んだことを道具として使って現実世界の問題を解決しようとする意識をもつことや、「自分はこう考えた」と思考過程を表現することの大切さについて助言を得た。

- (2) 対話的な学び

フローチャートを用いて考えを視覚化させたり、話し合う視点を与えたりして、対話を通して子どもが考えを広げ、深めることをねらった実践が報告された。

討論では、対話を行う中で考えをどのように整理するとよいか、子どもどうしの対話に教員がどのようにかかわっていくとよいかということなどについて話し合われた。

助言者からは、相手だけでなく自分自身の理解を深めるために対話を行うことや、子どもの実態に合ったツールを用いて根拠立てた説明ができるように支援することの重要性について助言を得た。

- (3) 思考力・判断力・表現力の育成

タブレット端末を用いて考えをまとめたり、共有・比較・再考する活動を取り入れたりすることで、思考力・判断力・表現力を高める実践などが報告された。

討論では、多様な考えを比較して共通点を見出す際に大切な考え方をどのようにとらえさせるとよいか、学習を振り返る際にどのような支援を行うとよいかということについて話し合われた。

助言者からは、大切な考え方を繰り返し価値付けていくことで子どもはその考え方を働かせられるようになることや、対話を通して多様な考えを他者から得ることで自分の認識が高められるなどの助言を得た。

3. 今後に残された課題

- (1) 現実世界と算数の世界をどのようにつなげて問題を設定したり、解決したりするとよいか
- (2) 個別学習を取り入れる際の教員の支援のあり方

数 学

1. 全体を通して

「主体的な学び」「思考力・判断力・表現力の育成」「学び合う力の育成」の三つの柱立てで、実践の報告や討論が行われた。

基礎・基本の定着のためにICT機器を活用した実践をはじめ、文章問題への苦手意識を取り除くことで学習に意欲的に取り組めることをねらいとした実践、既習事項を活用して日常生活を意識した問題に取り組む実践などが報告された。

2. 討論の内容

(1) 主体的な学び

問題を発展させるための視点を与えることで、自ら学習を探究させる実践や、ヒント動画を配信することで、子どもが自身の理解状況に応じて復習することができるようにした実践などが報告された。

討論では、単元や内容によるICT機器と紙媒体の使い分けや、汎用性があり継続して効果を出すことができる発問・指示の工夫について意見交換された。

助言者からは、学習の個性化は協働的な学びに内在していることや、紙媒体を用いて学習することによって得られていたメリットをICT機器を用いた授業形態でどう補完するか考える必要があるとの助言を得た。

(2) 思考力・判断力・表現力の育成

身近なテーマを題材として、関数関係を見つけるこの有用性を感じさせる実践や、既習の学習内容との共通点や相違点についてICT機器で共有することで、新たな知識を習得することのよさに気付かせる実践、他者の意見に対して肯定的・批判的な意見をもたせることで、対話的な課題解決を促した実践などが報告された。

討論では、子どもの言語力を高めるための数学の発問の工夫や、意見交流の方法について意見交換された。

助言者からは、子どもが発表・発言することが容易になる手法を用意しておくことや、複数の考え方ができる問題提示の必要性について助言を得た。

(3) 学び合う力の育成

ゲーム性をもたせた題材を用いることで、考えを伝え合う際にデータを活用する意欲を高めた箱ひげ図の実践や、ふきだしに自分の考えを記入し、根拠を交えながらペアで説明し合うことで、筋道を立てて表現させることをめざした実践、デジタルドリル教材の正答数やかかった時間を記録・蓄積し、学習に対し前向きに取り組めるよう促した実践などが報告された。

討論では、既習の学習内容とつなげて考えるための発問の工夫や、習熟の程度によって設定する学び合い・話し合い活動の工夫について意見交換された。

助言者からは、それぞれの解法についての長所や短所を理解した上で、学ぶことのよさを子どもがとらえる必要性や、習得型の学びの標準化やこの先の展望について助言を得た。

3. 今後に残された課題

- (1) 多様な考え方を引き出すことができる題材の工夫
- (2) 主体的な学びをすすめるための支援の充実やコンテンツの蓄積
- (3) ICT機器を活用した数学的活動の充実

第5分科会【理科教育】

物理・化学

1. 全体を通して

分科会は全員発表形式で行われた。小学校は物理四本・化学四本、中学校は物理六本・化学三本の計十七本であった。柱とする五つの観点をもとに進行されたが、子どもたちの主体的な学びを促す手だてや、ICT機器を活用し学びを支援する手だてを用いた報告が多く、具体的な支援・指導方法について活発な意見交換と討論が行われた。

2. 討論の内容

実践レポートの報告内容については、特に次の三観点に、重点がおかれていた。

(1) 身近な事象を学習と関係づけ、子どもたちの興味関心を高めるための工夫

小学校の総合学習で、遊具づくりのため裏庭へ重い廃タイヤを運ぶ際に持ち上げる必要感から、てこに出会わせ、一人一実験用の簡易で実験器を与えて追究させる実践などが報告された。中学校では、ペットボトルキャップをゴム発射台で飛ばす対戦型競技（オリジナルポッチャ）を導入し、ゴムの伸びとキャップの速さや移動距離との関係で運動エネルギーを追究させる実践などが報告された。

(2) 実験の見通しを立て、主体的解決のプロセスをすすめられる、授業デザインのあり方

小学校では、プチPBLを軸にした実験活動の導入により、問題解決の成果の整理・共有をはかる実践などが報告された。中学校では、4QSを導入して仮説設定支援を行うことで、実験の見通しをもたせ、且つ振り返りから仮説の再検討を行わせる実践や、ICT機器の活用で実験結果記録を充実させ、考察でそれらを利用した表現を可能にさせた実践などが報告された。

(3) 理科の見方・考え方や科学的知識を用いた学習課題のあり方

小学校では、風ゴムレースにむけて、車の移動距離とそれを変える要素との関係にもとづき、設定される作業課題にむけて操作を決定し技能を鍛える実践などが報告された。中学校では、中和滴定中の水溶液での電子挙動に対し子どもが抱く疑問から、ICT機器による粒子モデル表現を用いた説明で友だちに自分の考えを伝え、相互に理解を促し合う実践などが報告された。

報告の区分ごとの討論では、質疑応答の他、報告者間で情報交換や説明・意見の提案が行われた。また、理科指導の取り扱いにおける工夫事項の紹介も多く話題にあがった。例えば、音の性質の理解に楽器づくりを導入した実践報告などが話題にあげられた。そこでは、指導方法に関する質疑などが行われたが、学級全体で共有をめざす知識と個別に学び取る知識を教員が把握し、目的やねらいを達成することができる教材を選定することの可能性が議論された。また、授業の導入で子ど

もたちに「知りたい」と思わせることは、追究内容を明確にイメージし、知るためのプロセスを確認できる点で効果的であることなどが再確認された。

3. 今後に残された課題

助言者からは、「個別最適な学び」「協働的な学び」の分離への留意が指摘された。魅力的な課題を得た子どもたちが主体的に追究を行い始めたときに、個別の学びとしてとらえるのか、全体の追究を優先するのか、改めて教員が指導意図を明確にするとよいと助言を得た。また、教育研究の協議で、課題や手だてのプロセスの設定や成果をもち寄り情報交換や意見交換が行われ自実践を精緻化する機会が得られているが、さらにすべての子どもから得た妥当な検証データから実践の有効性を多面的に検討することが求められると助言を得た。

生物・地学

1. 全体を通して

川の流れの調査、地質調査といった学校ではできない経験を、モデルを使い体験的に学習する実践や、植物や生き物の飼育の中で、子どもが繰り返し課題を見つけ問題解決する実践、話し合い活動を工夫し、協働的に学習に取り組む実践などが報告された。

討論では、柱に設定された四観点のうち、「子どもの理科的な資質・能力を育成するための理科指導のあり方」と「身近な自然や、生命の大切さを取り入れた単元構成の充実」に重点がおかれた意見交換や情報交換が活発に展開された。

2. 討論の内容

(1) 子どもの理科的な資質・能力を育成するための理科指導のあり方

理科における「個別最適な学び」と「協働的な学び」の両立の仕方について議論された。理科の事象に対する疑問を個人でもち、その疑問に対する解決方法や答えを導き出すために個人の力に加え、班や学級などで意見共有することで考えを深めることが大切だと意見が出された。また、再び個人に返して意見共有した内容を自分なりに活用して考えることも重要だという意見が出された。具体的には、学級での意見共有を通して問題を見つめ直しながら、メダカを一人一匹以上飼育していく実践例が紹介された。

(2) 身近な自然や、生命の大切さを取り入れた単元構成の充実

理科の学習においては、子どもが実物を目にするのが最も重要であるという意見が出された。しかし、地学教材では身近に自然がないことが多いため、ICT機器を利用して映像を見せたり、モデルを使ったりして実物に近いものを子どもに見せる実践例が紹介された。また、生命の大切さは一回の授業で身につくものではなく継続的な学習が必要であるため、「特別の教科 道徳」などと関連付けながら学習していくことが大切であるという意見も出された。

(3) 助言者から

地球領域では、「スケールの大きい自然現象をとらえさせる」「自然現象に迫るロマンを感じさせる」「簡単に実証できない事象を、仮説を立てて考える面白さを味わわせる」「自然現象と災害のかかわりを学ばせる」こと、生命領域では「生物は環境に合わせて絶えず対応しており、そのことがまた環境に影響を与えていることを理解させる」「生物のいきいきとした姿を理解させる」ことが大切だと助言を得た。また、理科教育全般において、学べば学ぶほど疑問が生じるものであり、子どものその疑問を大切にしていくこと、教員自身が理科の神秘さや不思議さに目を見張る感性をもつことが大切だと学んだ。

3. 今後に残された課題

- (1) 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実
- (2) 新学習指導要領に対応した学習評価
- (3) 知っているレベルから使えるレベルに知識の質を上げるための授業デザイン
- (4) 生命観、地球観、理科の指導観をもった理科指導
- (5) 理科の見方・考え方を働かせた授業デザイン

第6分科会【生活科教育】

1. 全体を通して

栽培活動、学校探検やおもちゃづくりなど、多岐にわたる報告が行われた。どの実践も子どもの思いや願いをもとに授業展開の工夫がなされていた。

討論では、低学年という発達段階に合わせた協働的な学びについてや、子どもたちが成長を実感できるような振り返りの工夫について、さまざまな意見交換が行われ、たいへん有意義な時間となった。

2. 討論の内容

(1) 栽培活動を通して

栽培活動の中で生まれる子どもたちの困り感をもとに友だちと話し合い、問題解決していくことで、新たな気づきを得る子どもの姿があった。また、振り返りを工夫することで、上手に世話をすることができた自分自身の成長に気付くことが確認された。

- (2) 自然とかかわる活動を通して
自然に親しみをもち、夢中になって活動する中で愛着を育ませる実践が報告された。何度も自然とかかわる機会をもたせることで、自然のよさを実感することができることが確認された。
- (3) 自分の成長にかかわる活動を通して
自ら課題を設定することで、単元を通して意欲的に活動する実践が報告された。また、教具や思考ツールを工夫したり活用したりすることで、より意欲を高めることができることが明らかになった。
- (4) 学校探検を通して
学校の魅力に気付くとともに、自分の思いを表現する実践が報告された。友だちや他学年、教職員との交流を通して学校への愛着が深まる様子が伝えられた。
- (5) おもちゃづくりを通して
友だちと試行錯誤しながら気付きを高めていく実践が報告された。単元を通して意欲を持続させる支援の工夫について確認された。
- (6) 総括討論
「子どもたちが対象や他者とどのようにつながったとき、気付きの質が高まるのか」というテーマで話し合われた。
まず、「気付きの質が高まる」とは、どのような姿なのかについて話し合われた。そして、友だちと気付きを共有したり他者から認められたりすることで気付きの質が高まるとの意見が出された。
助言者からは、学習履歴を活用し、前時の振り返りを本時のめあてにいかすことで、学びの連続性が生まれることについて助言を得た。
また、低学年という発達段階をふまえ、物事を客観的にではなく、自分とのかかわりの中で物事をとらえさせることで、子どもたちの思いや願いが膨らみ、一つ一つの自己実現を重ねていくことが子どもたちの豊かな成長につながっていくことを確認した。

3. 今後に残された課題

- (1) 発達段階に応じた共同的な活動の工夫と、子どもたちの気付きの見取り方
- (2) 表現活動を充実したものにするためのICT機器活用の工夫

第7分科会【美術教育】

1. 全体を通して

二つのテーマに沿った実践報告と討論の後、「美術教育を通して子どもたちに伝えたいこと～子どもたちのゆたかな学びのために～」をテーマに、総括討論がすすめられた。

総括討論では、子どもたちが自分らしく幸せな人生を歩んでいくために、美術教育を通して生活や社会、人とつながり、経験値を高めていくことが重要であると話し合われた。そのために、表したいことや主題をもとに、多様な材料や用具・表現方法にふれたり、鑑賞活動を重ねて見方や感じ方を深めたりすることの大切さが確認された。また、さまざまなアプリケーションソフトウェアや生成AIなどが普及したため、子どもが思いを表現するツールの一つとしてそれらを取捨選択し、活用する力を身につけることの必要性や、題材のねらいを明確にし、有効であれば取り入れていく教員の判断力の必要性も確認された。

助言者からは、生活の中で「美しい」と感じるようにするためには、造形的な視点を理解することが必要であり、そのために、育みたい知識を明確にした題材開発や授業展開が大切であると助言を得た。また、子どもたちのICT機器の活用能力に高まりを感じたと助言を得た。

2. 討論の内容

- (1) 子どもの思いや考えを豊かにする題材の工夫
子どもが主体的に問題を追究し、発想を深めることができるようにするために、身のまわりの社会問題を解決するロゴマークをデザインして印刷し、エコバッグをつくる実践、思いが相手に伝わる表現ができるようにするために、ゲームやスケッチで対象を単純化したり、学校生活をよりよくするピクトグラムをデザインしたりする実践などが報告された。
討論では、個に応じた支援や表現方法について、系統性や他教科との関連についてなど、実践報告をもとに活発な議論がなされた。
- (2) コミュニケーション活動を通して発想や表現を広げる実践
子どもが互いの感じ方の違いを尊重しながら見方・考え方を広げることができるようにするために、名画に動きや音を加えたり、等身大以上のスクリーンに児童の作品を投影したりして鑑賞する実践や、生徒が主体的に学びを深めることができるようにするために、中学校のよさを小学校六年生にコマドリアニメで伝えるという目的と場を設定し、視点を示して自他の対話を促す実践などが報告された。
討論では、互いの見方・考え方や、つくりだす喜びを共有するために、班編成の方法やICT機器の活用のあり方、ペア学年や学校全体、さらには学校をまたいだ交流の意義深さなど、それぞれの実践報告をもとに活発な議論がなされた。

3. 今後に残された課題

- (1) 子どもたちの成長につながる、ICT機器やAIの活用のあり方
- (2) 表したいことや主題をもとに、造形的な視点を理解したり、表現方法を工夫したりすることができる題材の工夫

第 8 分科会 【音楽教育】

1. 全体を通して

音楽教育分科会では、学習活動における子どもたちの変容をわかりやすくとらえるために動画を取り入れた発表形式ですすめられた。歌唱・器楽・鑑賞・創作のすべての分野において、子どもたちどうしの対話や交流活動を取り入れ、主体的・協働的に音楽表現を追究することができるような手だてを講じた実践が多く報告された。工夫を凝らした手だてによって、子どもたちどうしがかかわり合い、変容していく様子がよくわかるものであった。実際に音楽表現をする場面におけるいきいきとした表情や楽しそうに活動している様子が印象的であった。子どもたちの実態をふまえ、めざす子ども像を明確にし、わかる楽しさ、できる喜びなどの経験を積み重ねていけるよう、さまざまな工夫をしていくことが大切であることが確認された。また、各実践において、ICT機器の活用が随所にみられ、学校教育の中でICT機器が自然に取り入れられるようになってきたことが確認された。討論の中では、デジタルの手軽さとは別に、実際に楽器にふれる場面や大人数で音楽づくりをする感動を味わう活動を大切にしたいということが話し合われた。

2. 討論の内容

(1) 子どもたちの主体的な音楽表現につながるICT機器の効果的な活用

各自治体で採用されている学習アプリに違いはあるものの、小・中学校ともに積極的な活用実践が報告された。ノート機能を使って、表現を可視化したり、リコーダーや鍵盤ハーモニカの演奏動画を配付したりすることで、安心して授業に参加でき、その後の主体的な学びにつなげられるという効果が報告された。また、ICT機器を録音・録画に使用し、子どもが客観的に振り返るためのツールとして利用したり、リコーダー演奏や歌唱の様子を録画し、教員が評価のために記録を残したりする手段として利用することも報告された。

創作の分野では、アプリを使用して地域の紹介動画のBGMづくりを音声や効果音を取り入れて制作したという実践も報告された。

ICT機器を使った学びは個別の学習には最適だが、協働的な学びにつなげる活用方法が今後の課題であると話し合われた。さらに、ICT機器はツールであり、目的ではないこと、教員の工夫があるからこそ、ツールがいきてくるということを忘れてはいけないという助言を得た。

(2) 音楽教育と地域のかかわり

地域に住む演奏家や伝統芸能を行っている団体を招いた特別授業などを通して、地域の音楽・生の音楽にふれる体験活動や、中学校の合唱コンクールに地域の小学校六年生を招待することで、小中の連携をはかったという実践が報告された。しかし、コロナ禍で地域とのつながりが切れてしまったこともあり、人材確保が難しいことや、音楽科の授業の中だけで行うには時間的な確保が難しく、他教科と関連付けるなどの工夫が必要だということも話し合われた。

3. 今後に残された課題

- (1) 子どもたちが協働的に音楽表現を追究できる効果的な手だて
- (2) 主体的な学習活動の中での教員の指導・支援のあり方

第 9 分科会 【技術教育】

1. 全体を通して

「材料と加工の技術」「生物育成の技術」「エネルギー変換の技術」「情報の技術」の四つの柱立てで実践の報告や討論が行われた。技術科の目標とめざす資質・能力の実現にむけて、話し合い活動や題材を工夫することで、技術の見方・考え方を働かせる実践など、十一本のレポートが報告された。

総括討論では、「①自ら学び、自ら考える探究型学習を意識した題材や授業展開の工夫」「②双方向性のあるコンテンツのプログラミングによる問題解決例や実践の課題」などについて話し合われた。

2. 討論の内容

(1) 材料と加工の技術

タブレット端末を活用して、生徒が主体的に調べ学習や発表がなされた実践や、学び合い活動や動画編集で道具使用のコツをまとめた実践などが報告された。また、試作品をつくることで計画段階で失敗に気づき、ミスのない作品づくりができたという実践が報告された。

討論では、自分なりの技術の見方・考え方を引き出す上で、最適化の観点を意識し、多面的・多角的に考えさせていくことや、安全のために工具の使い方をていねいに指導し、その上でコツや使い方を詳細に教え込むことの重要性が確認された。

(2) 生物育成の技術

さまざまな土壌資材の特徴を調べる学習を取り入れ、土の配合バランスを考えた栽培の実践や、未知の種子の栽培に取り組ませることで、光の有無や育成場所など環境に合わせた育成方法について追究する実践が報告された。

討論では、生産者と消費者の双方の視点を得ることで実際に学校での残飯が減るなど、子どもの実生活とのつながりを大切に工夫について意見交換された。

(3) エネルギー変換の技術

安全に、安心して生活できる未来社会について考えるために、シニアカーを題材としてギア比やタイヤの形状などを考える実践が報告された。

討論では、動力を用いた装置の技術を学ぶことは技術科ならではの分野であり、多くの課題が残るエネルギー利用について取り扱うことの重要性が話し合われた。

(4) 情報の技術

生活に結びつけやすい学習課題を設定した問題解決学習の実践やチャットアプリの開発、自動運転支援システムの考察など、PDCAサイクルを基盤とした問題解決の実践が報告された。

討論では、ブロックでのプログラミングから、言語を用いたプログラミングへの発展が情報技術の理解につながることや、生徒の学習意欲を高める教材との出合わせ方などについて話し合われた。

(5) 総括討論

「①自ら学び、自ら考える探究型学習を意識した題材や授業展開の工夫」「②双方向性のあるコンテンツのプログラミングによる問題解決例や実践の課題」について討論を行った。①については、子どもたちが切実感をもてる教材の選択や、自由設計の中で条件を絞ることで共通の課題をもち、仲間とのかかわり合いが深まったり、主体的な学びにつながったりするという意見が出された。②については、HTMLやCSSといった言語でのプログラム学習が、プログラミング的思考の習得につながるという意見が出された。

助言者からは、自ら見つけた課題が解決するまで意欲が続くテーマの設定が大切であるという助言を得た。

3. 今後に残された課題

- (1) 他者とのかかわりだけでなく、自分や教材との対話活動を取り入れた授業展開
- (2) プログラミング教材の選定や課題の設定

第10分科会【家庭科教育】

1. 全体を通して

子どもたちが考えを伝え合ったり、主体的に取り組んだりするための工夫がされた実践が報告された。

総括討論では、限られた時間数の中で授業に取り組むために、「他教科と関連付ける」「ICT機器を活用して時間短縮する」「家庭との連携が大切である」などの意見が交わされた。また、社会問題について考えさせるための視点の与え方について、「ニュースや新聞記事を取り上げる」「子どもたちの意見をつないで課題の価値を見出す」「企業の取り組みを紹介する」などの意見が交わされた。他にも、自分事としてとらえさせる授業実践の工夫として、「実生活を振り返ることで課題を見つけられるようにする」「よりよい社会にするために取り組まれている実践例を伝える」「地域社会の一員として考えさせることが大切」などの意見が交わされた。

2. 討論の内容

(1) 社会問題と関連させた実践

非常持ち出し袋を製作する実践では、実物をイメージした試作を行い、防災意識を高め、製作の必要性を実感させる取り組みが報告された。持続可能な社会の形成にかかわる実践では、SDGsをより身近なものにするためにSDGsポイントを意識した朝食づくりや、SDGsの目標を意識した夏の住まい方や衣服の着方・手入れについての課題解決に取り組んだ報告がされた。

(2) 興味をひく導入や、題材の工夫をした実践

衣生活では、導入で教材を活用して玉結び・玉どめを習得するという目的を明確にし、意欲的に授業に取り組みせる実践が報告された。食生活では、共通のモデルを設定し、学習内容をもとにモデルに対して改善点を手紙で説明する、将来の自分に手紙を書くなど、振り返りの仕方を工夫することで、よりよい食の選択について考えさせる実践が報告された。

(3) 思考を深める手だての工夫をした実践

消費生活では、責任ある消費者になるという課題に取り組むために、さまざまな思考ツールを効果的に使った実践が報告された。食生活、衣生活では、ポートフォリオ形式で自己評価を行うことで、学びの積み重ねを実感したり、自分の思考の変容を比較・確認したりできるようにした実践が報告された。

助言者からは①授業づくりにおいて目的は先にあるもの、授業は子どもの思考でつなげていくべきである②授業のどこに時間をかけるか、どこまで内容を掘り下げるかを見極めることが必要③子どもたち自身が未来をよくするため、コロナ禍を経て見えてきた本当に大切にしたいことを実践できるようにするとよい④「今日の授業で一生覚えておくことよいことがら」を意識して授業をすすめるとよいとの助言を得た。また、授業で活用しやすい教材・教具や、今日的な課題を扱った授業実践が紹介された。

3. 今後に残された課題

- (1) 子どもたちに学びを自分事としてとらえさせるための工夫、魅力ある導入
- (2) 子どもたちが意欲を保って授業に取り組み続ける工夫
- (3) 家庭との連携の工夫

第11分科会【保健体育】

体 育

1. 全体を通して

「体育でどのような子どもを育てるか、自ら考え行動する子どもをどう育てるか」を大テーマに、次の二点を研究主題として、発表・討論が行われた。

- (1) わかる・できる・かかわることを大切にしたい授業づくり
- (2) ねばり強く学ぶことをめざした教材や指導方法を工夫した授業づくり
どのレポートも、技能習得をめざした取り組みやかかわり合いの方法、主体的に体育学習に取り組むためのさまざまな工夫のある実践が報告された。

討論では、かかわり方の有効な手だてや、子どもたちが課題に向き合うためにどのような場をつくるべきか、教員のかかわり方などについて活発な意見交換がなされた。また、主体的な学びにつなげるための指導法などについて、活発な意見が出された。

2. 討論の内容

- (1) わかる・できる・かかわることを大切にしたい授業づくり
「ICT機器を活用して自分の課題とどのように向き合うか」「仲間どうしがかわり合うための授業内容の工夫」など、授業づくりの考え方について意見が出された。

討論では、教員が種目の特性をどのようにとらえ、課題をもたせるために、どのようにICT機器を活用するかが大切との意見が出された。各種目のもつ面白さにふれることで、「できるようになりたい」と課題をもつ重要性が確認された。また、課題に気付けなかった子どもに対して、カメラ機能を活用して動画を見比べたり、スロー再生して何度も見直したりすることで、課題に気付かせることも重要という意見が出された。

助言者からは、子どもたちが体育学習の中で、何を身につけることで主体的に活動できるようになるのか考える必要があるとの助言を得た。「何と」「だれと」「どこと」など一つのかかわりにおいても教員が十分に理解し、教材や環境の準備をする必要があるとの助言を得た。

- (2) ねばり強く学ぶことをめざした教材や指導方法を工夫した授業づくり
「子どもたちが自らやりたくなるような教材や教具を考える」「反転学習や評価活動の工夫をする」ことが効果的であるという意見が出された。

討論では、子どもたちが互いに評価活動を行うためのルーブリックの作成や教員が場の設定をすることが効果的であるという意見が出された。子どもたちが自分の技能に合った学習のすすめ方を考えることができるような、自由進度学習を取り入れていくことがよいのではないかと意見が出た。

助言者からは、生涯スポーツを見据えて「する・見る・支える」という視点を持ち、これまでの学習で主眼がおかれがちであった「する」部分の運動量だけではなく、これからは「見る・支える」部分の必要性を高め、子どもたちの活動量としてとらえ、バランスよく学びを保障するという視点をもつべきであるとの助言を得た。身をもって知る・相手の身になって考えるという体育ならではの学びを子どもたちが感じられる実践を増やしていくことが大切であるとの助言も得た。

3. 今後に残された課題

- (1) 「わかる・できる・かかわる」を深める学習内容の明確化と系統化
- (2) 「ねばり強く学ぶこと」の具体的な学習状況と課題・教材の設定と配列

保 健

1. 全体を通して

「子どもが生活の主体となるための保健教育」をテーマに、教材・教具を工夫した実践、子どもたちの主体的な活動を中心とした実践、学校内・外との連携を深めた実践などが報告された。報告を通して、健康に対する意識の高まりや、健康課題の解決にむけた実践力が着実に育っている様子を感じることができた。

2. 討論の内容

- (1) 生活に生きる保健教育
保健教育や委員会活動を通して、組織的・継続的にけがの予防に取り組んだ実践や、異学年交流や歯と口の健康教育を軸に、心と体の両面からアプローチした実践が報告された。

討論では、子どもが主体的に学ぶための手だてについて話し合われた。課題に気づき、自分事としてとらえることができるように、事前アンケート結果の提示や異学年交流、グループでの話し合い活動などが有効であるとの意見が出された。

助言者からは、子どもの思いに寄り添い、実態に合った課題を設定すること、楽しく学んだり、成功体験を積み重ねたりできるように手だてを工夫し、学びを継続することが必要であるとの助言を得た。

- (2) 保健・総合などでの指導のすすめ方
保健教育にICT機器を活用し、RPDCAサイクルを取り入れることで健康課題の改善をはかった実践や、子どもどうしの学び合いの場を設定し、ストレスの対処法について考える授業づくりを行った実践、感染症やその予防に関する知識の習得と対話的な学びを通して、生活の中の課題解決に取り組んだ実践が報告された。

討論では、校内の連携をはかるための手だてについて話し合われた。担任と養護教員とのよりよい連携を模索する意見

や、既存の会議やICT機器を活用した連携などについて意見が出された。

助言者からは、取り組みを年間計画に位置づけることや、取り組みの成果をフィードバックすることが必要であるとの助言があった。

(3) 指導方法・指導形態の工夫

ICT機器を活用し感染症予防に取り組んだ実践や、子ども主体の学校保健委員会でメディアとのかかわり方に取り組んだ実践、児童保健委員会から全校へ啓発した実践、家庭や地域と連携した実践などが報告された。

討論では、家庭との連携をはかるための手だてについて話し合われた。実践内容が子どもから保護者に伝わるように工夫する、保健だよりに保護者むけの記事を掲載したり、学年だよりに掲載して担任からも働きかけてもらったりするなどの意見が出された。

助言者からは、保護者をいかに巻き込むかは長年の課題であるが、積み重ねが大切であり、保護者の困り感に寄り添った働きかけが有効であるとの助言を得た。

(4) 心・命・性に関すること

担任と連携し、「スリンプルプログラム」を活用した実践や学校全体で「温もりあるかかわり合い活動」に取り組んだ実践、レジリエンスの向上をめざし、ストレスマネジメント教育に取り組んだ実践などが報告された。

討論では、日常生活での意識化・行動化を促すための手だてや、実践に対する評価方法などについて話し合われた。また、自分事としてとらえさせる工夫や行動を定着させるための生活点検カードの活用、実践に合った評価の方法などが話し合われた。

助言者からは、生活点検カードに保護者記入欄を設けることで保護者の協力が得られ、家庭でも取り組んでもらえることや、実践後の評価は、客観性をもち、ていねいに分析するとよいとの助言を得た。

3. 今後に残された課題

- (1) 子どもが自ら課題を見つけ、解決の方法を見出していく力を育むための指導・支援のすゝめ方
- (2) 他教科とどのように関連付け、評価をどのように行うか

第12分科会【自治的諸活動と生活指導】

小学校

1. 全体を通して

「たくましく生きる子どもを育てよう」を主題にして、活発に討論された。

子どもたちがよりよい人間関係を築くために、認め合い活動や異学年交流を通して活動した実践が多く報告された。また、子どもたちが自分自身を見つめ、自ら課題を見つけて取り組むことで、達成感や満足感を味わい、豊かな人間性を身につけた実践や、友だちとのかかわりを通して他者理解を深める実践などが報告された。

これらの実践報告をもとに、子どもたちの活動のあり方や意義、子どもたちの実態のとらえ方、それらをふまえた教員の支援のあり方について熱心な討論が展開された。

2. 討論の内容

- (1) 心理的な背景や発達段階をふまえ、子どもたち一人ひとりをどのように理解し、支援していくのか

日頃の児童の様子やアンケート調査、WEBQUなどを用いた分析を通して、教員が子どもたちの理解を深めた上で、個や学級に適した自他理解を深める実践や、子どもどうしがかかわる具体的な実践が報告された。

討論では、発達段階に応じた認め合い活動に継続的に取り組むことの大切さや、子どもの自己有用感や自己肯定感を高めていく手だてについて話し合われた。また、さまざまな実践を行うだけでなく、教員が毎日子どもとのかかわりを振り返り、一人ひとりの子どもを価値づけていくことの重要性も確認された。

- (2) 子どもの気持ちを大切に、実態を把握した上で、よりよい人間関係を築くためにどのような活動を展開していくのか

学校生活における認め合い活動や異学年交流などを通して、温かい人間関係をつくり上げていった実践が多く報告された。

討論では、よりよい人間関係を築くためには、まず子どもたちが共通の目標にむかって取り組むことが重要であると意見交換がなされ、子どもが主体的に活動するための支援を工夫することが必要であるとも話し合われた。そして、人間関係を広げるために、かかわる人数を段階的に変えていくなど、発達段階に応じたスモールステップを設定することの重要性も確認された。

- (3) どのようにして、集団の質を高めていくのか

話し合いや係活動などを充実させた実践や、学校教育目標や学級目標にむかって、主体的に活動できる子どもを育てた実践が多く報告された。

討論では、よりよい集団をつくるために学級で理想の姿を共有する機会や、自信がもてない子どものために子どもどうしのつながりがもてるようにするための支援が必要であると話し合われた。

総括討論では、たくましく生きる子どもを育てるための活発な討論が展開された。個の質を高めること、集団の質を高めること、どちらも大切なことであり、それらが相互作用する中で、子どもの必要感や切実感に寄り添った手だてを講じることが重要であると確認された。

助言者からは、生活指導は、学級活動の時間や日常場面だけでなく、授業の中でも行っていくことが大切であると示され、さらには、援助希求ができる力を伸ばしていくことが必要であるとも助言を得た。

3. 今後に残された課題

- (1) 発達段階に応じた自己理解や他者理解のあり方
- (2) 主体的で継続的な活動の取り組み方
- (3) 集団の質を高めるための活動のあり方

中 学 校

1. 全体を通して

「たくましく生きる子どもを育てよう」をテーマに活発に討論された。主体的に学ぶために、自己存在感を大切にしたい実践や、生徒会活動や学級活動を生かしながら個と集団の力を高める活動、家庭・地域と連携した活動を通して子どもたちの成長をめざした実践が報告された。これらの実践報告をもとに、子どもたちの実態をふまえた支援のあり方について討論が深められた。

2. 討論の内容

- (1) 子どもたちの気持ちを大切に、実態を正しく把握した上で、やる気を引き出し、自己存在感を味わわせるための支援のあり方

討論では、協力的・参加的、体験的な活動を学校生活の中に組み込み、その中で個や集団の課題を認識し、解決していくとする集団づくりが大切であると意見交換された。また、子ども主体で学校行事を実施するという事は、成功が担保されているわけではなく失敗をする可能性もあるが、子どもに成功体験を味わわせたいがために、教員が指示しすぎる可能性もあるので、教員側がどこまで関与するかの判断が非常に難しいという意見もあり、有意義な討論をすることができた。

- (2) リーダーの育成や集団の質を高めるための支援のあり方

討論では、子どもたちどうしが問題を共有した上で、その解決にむけて話し合い、実践する取り組みを続けていくことにより、力を合わせて解決しようとする子どもの育成について話し合われた。また、学級力アンケートによって学級の実態を把握し、PDCAサイクルを学級活動に組み込み、次のステップに自分の意見が反映される経験を積む中で、子どもたちの自己存在感を味わわせることの大切さなどについて討論が行われた。

- (3) 問題行動の解決や予防のための家庭や地域との連携、コミュニケーション能力の育成

討論では、安心・安全な風土、コミュニケーションスキル、ソーシャルスキルなどの言葉が多く出された。自他を大切にすることの重要性が話し合われた。また、長期欠席の子どもへの自立をめざした支援の実践が報告された。

総括討論では、スクールロイヤーを活用した事例を出しながら、学校と連携する関係機関について話し合われた。また、子どもの自主性・主体性を高めていくためには、子ども自身に当事者意識をもたせることや、教員側のきっかけづくりや提示の仕方に工夫が必要で、与えるのではなく支えることが必要であると確認された。

助言者からは、子どもたちそれぞれの特性や実態の違いを的確にとらえ、個に合わせたきめ細かな対応をしていくことが大切であるとの助言を得た。

3. 今後に残された課題

- (1) 子どもたちの気持ちを大切に、実態を正しく把握した上で、やる気を引き出し、自己存在感を味わわせるための支援のあり方
- (2) リーダーの育成や集団の質を高めるための支援のあり方
- (3) 問題行動の解決や予防のための家庭や地域との連携、コミュニケーション能力の育成

第13分科会【能力・発達・学習と評価】

1. 全体を通して

「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させることで深い学びを実現する授業改善をめざした実践や、授業の振り返りや学んだ内容を共有する協同学習を通して、主体的に課題解決に取り組む生徒の育成をめざした実践などが報告された。

また、ICT機器の活用を通して、子どもたちが主体的に学習に取り組むことができる手だての工夫や、表現力を高めたり、思考を深めたりすることができる活動の工夫の実践などが報告された。

さらに、ゼロカーボンシティの実現にむけて、主体的にかかわろうとする子どもたちの育成の実践や、教材やルールを工夫することで基礎的な技能を向上させ、仲間とかかわり合いながら、できる喜びを味わうことをねらいとした実践、根拠を明確にした主体的・対話的な学習を通して読みを深めさせる実践などが報告された。

2. 討論の内容

- (1) 主体性を育てる取り組み

討論では、主体性を育てるには、「楽しさ」や「できるようになる喜び」が感じられることや、安心して取り組める雰囲気づくりに加え、子どもたちの「やってみたい」と思える授業づくりをしていくことが大切であるという意見が出された。

また、子どもたちが自ら課題を見つけて、自分で追究していくことで、学ぶ楽しさを見つけていくことが主体性を育てることにつながっていくという意見が出された。助言者からは、「一時間の授業や一つの単元の授業だけで終わらず、学校で学んだことを家庭でもやってみようという気持ちをもたせていきたい」という助言を得た。

(2) 指導と評価の一体化をはかるためには

討論では、教員の指導に対して、子どもの反応や授業前後の考えの違いを見取ることや、子どもがやりたいようにやらせるだけではなく、目的をはっきりとさせ、ねらいに応じた評価をすることが必要であるという意見が出された。また、評価をしていく上で最低限度の制約や条件を与え、一定以上の到達点に達した上で適切な評価ができるのではないかという意見が出された。さらに、実践の発表では、OPPシートを使って振り返りを記入させて主体的に学ぶ姿の変容を見るなど、さまざまな個に応じた評価についての報告があったが、限られた勤務時間の中で、どのような場面で、どのように評価をとっていくかということを考えていく必要があるという意見が出された。助言者からは、教員による見取りを評価の基盤とし、掲示物や小テストなどのさまざまな場面で子どもの姿を見取ることが大切であるという助言を得た。

3. 今後に残された課題

- (1) 子どもたちが「やってみたい」と思えるような課題の設定、限定的な使用とならない効果的なICT機器の活用の仕方について
- (2) さまざまな学習場面での適切な評価のあり方について

第14分科会【特別支援教育】

1. 全体を通して

「ゆたかに生きるための力を育む」というテーマのもと、十三本のレポートが報告された。

子どもの特性や教育的ニーズを把握し、学習意欲を高めるような学習活動や教材・教具を工夫した実践、人とかかわる力やコミュニケーション能力を高めるための実践、自己肯定感を高め、子どもたちが主体的に学ぶ実践などが報告された。

2. 討論の内容

(1) 学習指導をどのようにすすめるか

教科別の学習指導では、国語科の指導による実践が二本報告された。自分の思いや考えを相手にわかりやすく表現できる子どもの育成をめざした実践、子どもの特性や教育的にニーズに合わせた実践が報告された。生活単元学習の指導による実践は二本報告された。福笑いを通して友だちとのかかわりを深めるユニークな実践や、子どもたちを中心に運営する「くすくすスマート」を通して、合意形成などを育む実践も報告された。また地域で知恵を出し合い、子どもが生活に生かしやすい道徳による実践も報告された。さらに、生活上の困難さに注目して取り組んだ自立活動の実践や、総合的な学習や生活科の授業を活用した野菜の生産販売の実践も報告された。

討論では、子どもたちの自己肯定感をどのように高めていくかという点について共有がはかられた。その中には、保護者からの情報やWISCなどのアセスメントを通して実態を把握した上で子どもたちの成長やがんばりを認めていること、周りの教員の理解や連携の大切さが指摘された。さらに連携をする際、子どもたちが自分でできたことを他の教員や保護者にも共有することで多くの人にほめられることが大切だという意見も出された。また子どもたちの自己肯定感を高める上で、アセスメントの大切さを再確認するとともに、子どもの自己決定を尊重することの大切さが指摘された。また、子どもに合わせられるようにたくさんの自立活動を用意し、子どもたちがやりきったことを実感できるようにする事例も紹介された。

(2) 人とかかわる力を育てるための指導

他者とかかわり合い目標にむかって自分の役割を果たすことができる子どもの育成をめざした実践、児童・生徒理解の視点からクラスの子どもたちとかかわる実践、個の特性を生かし身近な人とかかわりを楽しむ子どもの育成をめざした実践が報告された。

討論では、交流・協同学習において人とかかわる場面や場所をどのように設定しているか、それらの事前・事後の学習をどのようにしているかをテーマに話し合いが行われた。

人とかかわりを季節のイベントで行ったり、校内の教員をゲストティーチャーとして招いたりする活動の紹介や、意図的に子どもたちがかかわらざるを得ない状況をつくるようにしている意見も複数報告された。また中学校区の小学校で交流する事例がいくつか報告された。例えばオンラインで交流を行う、直接会っておもてなし体験を行うなどがあり、中には進路に関した交流会も行われていると報告がなされた。

(3) 特別支援教育をどのようにすすめるか

グループ通級の活動実践や通級指導教室の役割について考えた実践、これまでの指導法を見直し、子どもに寄り添った指導を行うことで意欲を高めることができた実践が報告された。

討論では、インクルーシブ教育をどのように推進していくべきかをテーマに話し合いが行われた。中学校では、文字の読みが苦手な子どもなど、心情に配慮して苦手なことをさりげなく支援することが大切であるという意見が出された。また、全職員が情報共有や児童・生徒理解を行うことが大切であることが確認された。そのためには、職場の風通しのよさや外部の専門家チームによる児童・生徒のアセスメントがより児童・生徒理解につながるという意見として出された。

3. 今後に残された課題

- (1) キャリア教育の視点を取り入れた実践
- (2) ICT機器を効果的に活用した実践
- (3) 子どもたちが主体的に学びにむかうことができる実践

第15分科会【進路指導・キャリア教育】

1. 全体を通して

基礎的・汎用的能力を育むために、体験活動やゲストティーチャーによる講演を通して望ましい職業観や人生観を育む進路指導の実践や、ESDを柱としたキャリア教育を通して自己の生き方を見つめる実践が報告された。また、報告の中で共通していたのは、キャリアパスポートの充実とキャリア教育のとらえ方である。キャリアパスポートにおいては、学校の実態に応じた形式を作成し、充実させることで、校種間や各学年で系統的・継続的な教育になるよう実践されていた。キャリア教育のとらえ方においては、「職業教育」ではなく、「生き方教育」としてとらえ、自己の人生を見つめさせた。

2. 討論の内容

- (1) 啓発的な活動や体験に対して、子どもたちの意欲を引き出し、系統的・継続的に取り組ませるための手だてについて
ゲストティーチャーによる講演を通して、子どもたちの意欲を引き出す実践が報告された。ゲストティーチャーに実際に来校してもらうだけでなく、オンラインでつなぎ、海外の方や多方面で活躍している方にも講演してもらうことで、より成果が上がる事が確認された。
- (2) 自己を見つめ、望ましい職業観・人生観を養うため、学校と地域の連携について
水田が多い地域では稲作体験、歴史ある地域では校区を取材する活動などの体験活動が報告された。地域の特色に応じた学校と地域の連携の重要性が確認された。
- (3) 先を見て「生き抜く力」を育む、明確な目的をもったキャリア教育の計画について
各学年ESDカレンダーを作成し、教科横断的に一年間の見通しをもって教育活動にあたる報告がされた。また、ESDすぐろくという掲示物をつくることで、子どもたちにも一年間の見通しをもたせた。教員だけでなく、子どもたちと一体となって取り組むことでキャリア教育の成果を上げていく必要性が確認された。
- (4) 各教科や総合的な学習を通して、学校全体で共通理解し、四つの基礎的・汎用的能力を育成できるキャリア教育の体制について
学校経営案のうち各教科や各行事において、四つの基礎的・汎用的能力のどれを育むものなのかを明示した報告があった。キャリア教育の目標である四つの基礎的・汎用的能力を、学校全体で共通理解のもとで取り組む必要性が確認された。

3. 今後に残された課題

- (1) キャリア教育の実践が系統的・継続的なものになる計画的な指導
- (2) 学校・保護者・地域の連携によるキャリア教育
- (3) 子どもたちがいかにキャリア教育の四つの基礎的・汎用的能力を意識させるか
- (4) 子どもたちの実態に応じたゲストティーチャーの依頼

第16分科会【教育条件整備】

1. 全体を通して

「子どもの学習権の保障のために」を主題に、ICT機器の整備状況と活用に関する教育条件整備や、外国人児童生徒を支える日本語指導体制についての実践が報告された。討論では、GIGAスクール構想により、一人一台のタブレット端末が導入されたことで、教育活動を充実させていくことができている一方で、活用するための教員研修や研究時間が不足していることが報告された。また、普通教室以外の無線LAN環境が整備されていないことや、一度に多くの端末を使うことによって通信障害が起こることにより、ICT機器が十分に生かし切れていない現状も報告された。さらに、多くの外国人労働者とその家族が日本に滞在する機会が増えている現状から、日本語指導体制をさらに整備していくことが喫緊の課題であることも話し合われた。

2. 討論の内容

- (1) 子どもたちが意欲的に学ぶことのできる学校をめざして
海部地区の学校における教育の情報化の現状について、ICT機器の整備状況やICT機器を活用することに対する教員の意識調査の結果が報告された。また、ICT機器を活用した授業実践や今後の課題について報告された。討論では、県内各地におけるICT機器の整備状況やそれに伴う問題について活発に意見交換された。
助言者からは、講師の教員や事務職員の方々を含めた教職員全員にタブレット端末を整備することの必要性や、タブレット端末を幅広く安全に活用するために、ネットモラルについても指導していく必要があると助言を得た。
- (2) 学校での多文化共生をめざす教育条件整備
外国人児童生徒教育体制の充実のために開設された、通級指導教室（初期支援コース）「みらい東・西、きぼう」の取り組み、国際教室における外国人児童生徒教育相談員をはじめとする人的支援や、日本語能力をのばすための授業実践について報告された。討論では、外国人児童生徒の居場所づくりに関する取り組みや、卒業後の進路について話し合われた。
助言者からは、災害時における子どもたちの命を守るためにも、外国人児童生徒教育相談員や登録バイリンガル、外国人児童生徒対応スクールアシスタントの増員をはかることに加え、高い専門性が必要となる職業だからこそ、給料を上げるなどの待遇改善をはかることが必要だと助言を受けた。また、外国人児童生徒の居場所づくりのために、文化や宗教の違いを周囲が理解し合える環境づくりや、保護者と密に連絡を取り合っていくことが大切であると助言を受けた。

3. 今後に残された課題

- (1) 教職員全員のタブレット端末の配備や特別教室への無線LAN環境の整備及び高速大容量の通信ネットワークの整備をすすめていくこと
- (2) すべての外国人児童生徒が安全、安心な教育活動が行えるように、通級指導教室のさらなる増設や、外国人児童生徒教育相談員、登録バイリンガル、外国人児童生徒対応スクールアシスタントの増員などの整備をすすめていくこと

第17分科会【過密・過疎、へき地の教育】

1. 全体を通して

実践報告を行ったいずれの学校も、小規模校・へき地校であることの利点や課題をふまえ、学校や地域の実態に応じた教育活動を行っていた。そして、各学校、特色ある教育活動を展開するために、地域と学校が諸課題を抱えるなか、子どもたちに身につけさせたい力を明確にし、地域の「ひと」の思いにふれることができるよう工夫を凝らした実践であった。これらの報告をもとに討論が行われた。

2. 討論の内容

- (1) 子どもに身につけさせたい力を明確にし、大規模校・小規模校の特性を生かした教育支援のあり方
郷土学習を位置づけたカリキュラムを、子どもの実態に合わせて編成していく必要があることが話題にあがり、討論が展開された。社会で生き抜く力を身につけるための方策について意見交換され、その中で、地域や自分自身の課題に目をむけて解決まで見通す力、自立的に生きる力を身につけることを主軸に置いたカリキュラムの必要性が示された。
助言者からは、地域教材から身につけた力を、地域に生かせるような教育活動を展開する重要性について助言を得た。
- (2) 過密・過疎、へき地における地域の「ひと」の思いにふれ、かかわる教育活動のあり方
地域と学校がかかわり合う教育活動について話題があがり、討論が展開された。
参加者からは、地域行事を学校行事として位置づける事例が紹介された。地域と学校のつながりがうかがえ、持続可能な地域づくりをめざすものであると感じられた。しかし、地域住民の高齢化や多様化、教職員の人事異動により、地域特有の文化を教育活動の中で展開する困難さを感じる主旨の発言も聞かれた。このような状況のなか、地域講師を学校に招いて学習をすすめたり、地域の観光協会などと連携したりする必要があると話し合われた。
助言者からは、地域と連携し、子どもの居場所感や自己肯定感を高めていくふるさとでの経験を積み重ね、ふるさとを大切にすることを醸成していくことが重要であると助言を得た。
- (3) コロナ禍、学校の統廃合など、諸課題を抱える中での地域と学校のあり方
学校統廃合による地域との関係性について話題があがり、討論が展開された。参加者からは、閉校により地域と学校のかかわりが絶たれていく事例が紹介された。また、コロナ禍による教育活動の制限や、教職員の働き方改革の推進によって学校行事が精選され、地域と連携して培われてきた小規模校のよさが失われていく可能性が懸念された。地域の思いを生かしながら、学校の実態に合わせた教育活動の推進が必要であると話し合われた。
助言者からは、コミュニティ・スクールや地域学校共同本部と連携して、地域とのつながりをつくり直すことや、新たに構築していく必要があると助言を得た。

3. 今後に残された課題

- (1) 子どもに身につけさせたい力を明確にし、大規模校・小規模校の特性を生かした教育支援のあり方
- (2) 過密・過疎、へき地における地域の「ひと」の思いにふれ、かかわる教育活動のあり方
- (3) 学校の統廃合など、諸課題を抱える中での地域と学校のあり方

第18分科会【情報化社会の教育】

1. 全体を通して

GIGAスクール構想により、一人一台のICT機器が導入され、それらを活用し、個の学びの充実をはかり、情報を共有することで学びを深める授業実践、ICT機器の基本的な操作技能や思考ツールを活用した分類・整理の仕方、情報モラルなど、学習活動の中で情報活用能力の育成をはかる授業実践、体験的な活動を通して子どもたちのプログラミング的思考を育成するプログラミング教育の授業実践などが報告された。

2. 討論の内容

- (1) 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実をはかるために、どのようにICT機器を活用していけばよいか
子どもたちの考えを整理したり、共有したりする思考ツールや協働学習支援ソフトの活用、「個別最適な学び」のためのAI型ドリル活用などの実践が報告された。
討論では、デジタルとアナログの教材の使い分けや、低学年におけるICT機器の基本的な操作指導について意見交換が行われた。
助言者からは、個々の考えを共有し、深めることで、多面的・多角的に考える力が身につく、将来につながっていくこと、子どもたち自らが情報を収集・整理し、さらにその情報の信ぴょう性や客観性を確かめていく活動が大切であるとの助

言を得た。

- (2) 子どもたちの情報活用能力の育成をはかるために、どのような学習活動をすすめていけばよいか
低学年における情報モラル教育の実践、タイピングやアプリの操作の技能の習得に関する実践、自分の考えを分類・整理する力を高めるための思考ツールの活用法などが報告された。
討論ではICT機器の操作に苦手意識をもっている子どもに対する有効な支援や、タイピングの段階的・継続的な指導法、思考ツールの活用法について意見交換が行われた。
助言者からは、インターネット上で交流を行うためには情報モラルの知識が最低限必要であることや、これからの時代、情報活用能力がより求められるようになるため、日常的なICT機器の活用が必要であるとの助言を得た。
- (3) プログラミング教育において、プログラミング的思考を培うためには、どのような学習活動をすすめていけばよいか
学校体制で取り組んだ、学年に応じたプログラミング学習や異学年への発信、論理的思考力を身につけるための主体的で対話的なプログラミング学習の実践が報告された。
討論では、指導者自身のプログラミングの技能の習得方法やプログラミング学習の実践後の子どもたちの変化について話し合われた。
助言者からは、コンピュータに意図した処理を行わせるための論理的な思考が大切であること、今後の生成AIの適切な利用についての助言を得た。

3. 今後に残された課題

- (1) ICTを活用し、子どもが自己選択・自己決定し、子ども自らが学んでいく形への授業観の転換について
- (2) 「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現するためのICT機器の有効的な活用について
- (3) 基本的な操作スキルや学年に応じた情報モラル教育のあり方、情報活用能力の体系的な習得について

第19分科会【読書・学校図書館】

1. 全体を通して

学校司書や学校図書館、市立図書館と連携をはかりながら、教科や単元の学びにつながる本を、子ども自らが選択して、問題解決のために活用していく実践や討論が行われた。物語だけではなく、図鑑や百科事典などの図書資料の活用を手だてとして講じる有効性について話し合われた。

個別最適化を推奨する現在の教育において、誰もが学びの材料として図書資料を活用したり、物語の内容を読み取りながら理解したりすることの重要性が確認された。

インターネットと図書の調べ学習の利点をそれぞれ子どもが理解した上で、活用していく時代が求められる。さまざまな教科において読書・学校図書館との併用をすすめていくための実践報告、および、活発な意見交換が行われた。

2. 討論の内容

- (1) 読書活動
級友とその本のよさについて話し合ったり、想像力をもってオノマトペなどで表現したりする対話的な読書活動を通して、物語を読み深めることや純粋に読書を楽しむことにつなげることを検証した実践が報告された。兄弟学級などの異学年や教職員による読み聞かせをコミュニケーションツールとして活用し、豊かな心や情操を養うための手だてについて討論が行われた。
- (2) 図書・情報活用
国語科の作品づくりや、古典の読み取りに図書資料や百科事典を使う実践、それらを思考ツールと組み合わせて表現することについて討論が行われた。
- (3) 図書館運営・連携
委員会活動などを通して、子どもとともに、学校図書館の整備や図書選定を行う実践、生活と結びつけながら学びを深めるために、実物と図書資料を並べるなどの手だてを講じた実践について質疑応答が行われた。
- (4) 情報交換
図書資料の活用、図書館運営、読書活動をすすめていくために教員と学校司書との連携や保護者とのかわりについて情報交換がされた。担任する学級とは異なる学級で読み聞かせを行い、交流の中で読書の楽しさを感じさせるという事例や、図書資料として活用したい図書を学校司書と連携しながら選定するといった事例が紹介された。
限られた時間の中でも、読書活動や図書の大切さを子どもに実感させることができる支援や教育をめざし、各自治体の図書教育の動向が意見交換された。

3. 今後に残された課題

- (1) インターネットの普及に伴う読書離れに対して、調べ学習での図書活用や、学校司書との連携を積極的に行い、それらを何年もかけて積み重ねていく習慣づけをしていく工夫
- (2) 他教科での図書活用をめざし、思考ツールなどを用いて、子どもたちが課題解決のために自分の意見をもつ材料として、使いたいと思わせるような工夫
- (3) 子どもたちが物事や学びに対して、具体的な意見や根拠をもてるように、読書活動や図書活用、図書館連携を行う工夫

第20分科会【総合学習】

1. 全体を通して

身近な事象を探究課題として取り上げ、他者とかがわり合いながら、主体的に取り組む子どもの育成をめざした実践が多く報告された。

一つの教材にかかわる多様な人々をゲストティーチャーに迎え、その思いにふれることで課題に対して多面的に思考する実践や、思考ツールで情報を整理し、課題意識を高める実践、まとめ・表現の場面で他者からの評価によってまとめたものを改善する実践など、子どもが思いや願いをもって活動をするための方法を模索する教員の熱意に感心させられた。

2. 討論の内容

(1) ゲストティーチャーを活用する上で教員が意識すべきこと

討論では、ゲストティーチャーは、どの場面で子どもと出合わせるかということについて話し合いがなされた。その中で、単元構成が大切であるという意見や、子どもの活動や目的を伝えるためにゲストティーチャーとの打ち合わせを入念に行うことが大切であるなどの意見が出された。また、ゲストティーチャーと出合わせる際には、子どもの興味・関心や必要感を高めておくことが大切だという意見も出された。

助言者からは、ゲストティーチャーを活用する場面は必要だと感じたときであることや、ゲストティーチャーと双方向的なかかわりをもつことで、協働的な学びにつながるなどの助言を得た。また、単元構成や指導計画の評価と改善を前年度末に行い、次年度に引き継ぐことが大切であるとの助言を得た。

(2) 子どもたちが探究課題を自分事としてとらえるための工夫

子どもたちが課題を自分事としてとらえるために教員が意識すべきことについて討論が行われた。記述や発言によって把握した子どもの思いや願いから活動を始めることで、自分で活動をすすめている実感をもつことができるという意見や、他者とかがわり、身近な人の困り感を聞くことで、それが自分の困り感につながるのではないかと意見が出された。

助言者からは、SDGsのような題材を扱うときには、題材そのものに関する知識獲得が目的にならないようにすることが大切であり、SDGsの視点で自分の生活を見つめ直したり、ゲストティーチャーの思いを自分に置き換えたりするような姿は、自分事として考えている姿と言えるとの助言を得た。また、探究的な学習では、はじめに理想の姿を提示し、理想と自分の現状との間にあるずれや隔たりに気付かせることで課題を設定できるという助言を得た。

(3) 総括討論

探究的な学習を実現するために教員に求められることについて話し合われた。

探究的な学習をすすめるために理想と現状とのずれに気付かせて課題意識をもたせることや、子どもたち自身が探究的に学び続けることができるようにすることの重要性が確認された。そのために、自分事の課題になっているか、子どもが自ら行動をしようとするのを待ち、子どもを信じて任せることの大切さについての意見が交わされた。

助言者からは、子どもたち自身に探究のサイクルを回させるために、教員が活動や振り返りを評価し、子どもに還元することが重要であると助言を得た。また、子どもたちに探究の流れや評価規準を提示して意識させたり、子どもたちの声をもとに単元計画を修正したりしていくことも効果的であるとの助言を得た。

3. 今後に残された課題

持続可能な実践とするための学校体制のあり方や地域との連携

特別分科会【特別の教科 道徳】

1. 全体を通して

小中合わせた十三本のレポートでは、子どもたちのアンケートを活用し問題意識をもたせる実践、多面的・多角的な見方へとつながる思考ツールの活用や問い返しの工夫を取り入れた実践、協働的な話し合いを行うためにファシリテーターを育成するマニュアルを取り入れた実践、子どもたちの考えを表出し、比較・検討しやすくなるICT機器を活用した実践、自分事として考えるために役割演技を取り入れる実践など、さまざまな手だてをもとにした実践が報告された。討論は、「さまざまな工夫が、子どもたちの自己の生き方、人間としての生き方を深めることにつながるものとなっているか」に重点をおいて展開され、活発な意見交換が行われた。

2. 討論の内容

(1) 小学校低・中学年の実践について

【アンケートを活用した発問の工夫】

生活アンケートを事前にとり、授業の導入で紹介したり、アンケートの結果から子どもの実態をとらえ、授業の中で行う主発問や、さらに考えを深める切り返しの発問を考えたりするなど、子どもが学習内容を、自分事としてとらえることができるように手だてを講じている実践が報告された。

【思考の可視化】

子どもたちのさまざまな思考が視覚的にわかりやすくなるようにXチャートやYチャートなどの思考ツールで考えを分類したり、自分の立ち位置を明確にするために、ポジショニングなどのICT機器を取り入れたりして板書を工夫した実践や、互いの考えを共有したり、思考のつながりを助けたりすることで、多面的な見方・考え方ができるような実践が報告された。

(2) 小学校高学年・中学校の実践について

【実生活につなげる】

自分事としてとらえ、本音で話し合うことができるように、子どもの意見を可視化させ板書を工夫した実践や、地域と連携しゲストティーチャーを招いた実践、道徳的価値の大切さと実現する難しさをとらえた上で、なりたい自分の姿を考えさせる思考ツールを用いた実践など、学んだことを実生活につなげようとする姿をめざした実践の報告がされた。

【議論を活発にする工夫】

ICT機器を活用して多様な意見にふれ、自分の考えをもつことができるようにした実践や、議論の時間を確保するために、発問の数や子どもの記述を厳選した実践などが報告された。また、子ども主体の議論を促すための工夫について意見交換がなされ、話し合いのマニュアルを作成した例や、子どもの意見をつなぎ、問い返しを行う例などが紹介され、活発に話し合いが行われた。また、議論を深めるための教員の役割や、教員の問い返しについて意見交換がなされた。

3. 今後に残された課題

(1) 話し合い活動のいっそうの充実

AかBかだけの議論ではなく、グレーゾーンの部分を問うような発問の工夫をする。ICT機器を活用する授業は積極的に行うべきだが、長所と短所を見極めた上での活用方法を検討する。子どもたちがじっくりと考える時間を設けて、活発な議論ができるよう授業展開を工夫する。

(2) 内容項目にとらわれない授業づくり

教員の発問により、子どもは生き方の模擬体験を行う。子どもがゆったりと自己内対話をする時間を確保したり、教員がしっかりと子ども理解をする時間を確保したりする。教員も一緒に考えることで、子どもたちが新たな価値観を発見し、自己の生き方を深められるような授業のあり方を検討する。